

次世代を担い、農業の未来を拓いていく若手農業者。彼らとビジョンを共有し、夢を実現させようと奮闘するTAC。二人三脚、模索を続けながら生活者に思いを伝える姿をレポートする。

□ 千葉県 JA長生

☑ 滋賀県 JAこうか

□ 岩手県 JA新しいわて

□ 栃木県 JAしおのや

□ 長崎県 JA島原雲仙



▼若手農業者 田中孝一(左)
JAこうか TAC 木村郁美(右) ㊤

▼「忍葱」ブランドで販売を展開㊦

▼JA農場の管理運営、野菜定植作業の請負などで生産者をサポート㊧

ブランド野菜「忍」を展開

「農業の魅力は、自分の力次第でどこまででもできること」

田中孝一(27)は2年半ほど前に脱サラして就農、水稲と露地野菜を複合経営する父から野菜部門を引き受けて経営分離し、独り立ちした。TACの支援を受けてJAこうかのブランド野菜「忍シリーズ」のタマネギと白ネギ、そしてキャベツなど露地野菜を、3㍻超で栽培する。「甲賀=忍者」として広く一般に認知されていることを武器に「忍」の文字をロゴマークに活用したブランドを展開、付加価値を高めるJAこうかの戦略の一環だ。

米価の低迷などを受け、JAは水稲との複合経営で野菜振興を掲げた。農家経営の安定化のために、2年ほど前に耕作放棄地を「JA農場」として開設。離農者らから農地を引き受け、一定程度整備して貸し出している。TACの木村郁美(29)がサポートし、田中はその第一号となった。

JA農場は、新規就農者への貸し出しも想定し、出納帳の記入など経営管理に関わる初歩的なことから栽培指導、収穫機の貸し出し、定植機のオペレーター付きの貸し出し、各種改善の提案まで幅広く支援する。自身で水田から畑地に転換する膨大な時間や費用、農機を中心とした

初期費用を抑えたかった田中のニーズに合っていた。3㍻超の面積をこなせるのはJAの支援の力が大きい。

「立派なもの」を確実に提供

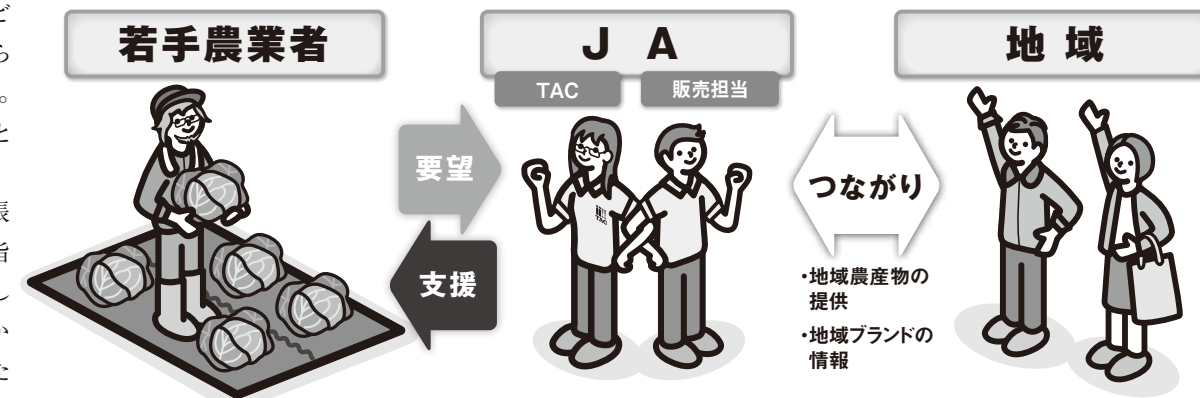
木村は生産者と接する時、他の生産者を引き合いに出したり、要点を紙に書いて渡したり、伝え方を工夫する。「3年もすると農家さんと息がそろってくる」と言う。周囲も認めるきめ細かなコミュニケーションがあってJA農場の仕組みが機能し、田中の経営に生かされる。

JAの営農と販売の部署は同じフロアにある。木村は販促イベントを手伝うことも多い。販売の現場を見て、新たな販路を提案する。より多い出荷につながれば生産者に喜ばれる。田中も、新しい品目としてスイートコーンやジャガイ

モなどを提案され、取り組んだ。

木村がTACになって3年。現場に出て最初に感じた「生産者の経営の厳しさ」が心の底流にある。「農家さんの経営が少しでも良くなるようにJAが率先しないといけないうし、農家さんと一緒に良い方向を目指し、同じ船に乗って苦楽を共にしていきたい」と話す。

作することに専念できる田中は、生活者に向けて「立派な農産物を確実に出荷する」ことを今、一番大事にしている。そのため選別作業も丁寧に行う。今後の展望としては、生活者の求めるものであれば、「手間がかかって、みんながやらないものでもやりたい」と語る。生活者のニーズを知るJAの提案力は頼もしい。農業の魅力は、自分の力次第。まだまだ新しい挑戦が、田中を待っている。(敬称略)



TAC(タック)とは、
『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276 www.zennoh.or.jp

全農